

家譜に見る

恩納間切の検者とその周辺

恩納村史「歴史編」専門委員 輝広志

「家譜」とは何か？なぜ「家譜」をめくるのか？

家のルーツを知る史料に家譜があることをご存知でしょうか。今回は「歴史編」の専門部会で収集・整理している史料の中から家譜を紹介します。

家譜には、先祖から子孫までの一族代々の関係を示す「世系図」と、先祖や子孫の勲功や履歴などを記した「記録」が収録され、一般に「系図」とも呼ばれています。1689年、首里王府に「系図座」という役所が設置されて以後、「士族」の各家から家譜が2部提出され、1部は「系図座」が管理し、もう1部は「首里之印」が捺されて各家に下賜されました。近世琉球の身分は、大きく分けて「士」（いわゆるサムレー。廃藩後の呼称は「士族」と「百姓」（いわゆる庶民。廃藩後の呼称は「平民」）の2つがあり、家譜を持つことで公的に士と認められたのでした。ちなみに首里王府は、士を「町方」に、百姓をおもに「地方」というように、身分により居住についても固定していました。

さて、士の証である家譜を一つひとつめくっていくと、近世琉球の恩納間切に関連する記事に出会います。なかでも記録の部分では、人物の活動内容や勲功、首里王府からいつ誰がどこの土地を知行地として許されたか（誰が間切を領有する惣地頭または村を領有する脇地頭になったか）、そのほか婚姻関係等が記されています。それらに注目することで、人物の活動を通じての「恩納」という場の歴史的な

関わり、士と恩納出身者との関係、引いては士と「恩納」との関係を知る手掛かりになり得ます。

現在、家譜にある「恩納」関連の記事の調査・確認中であり、断片的な情報の記事も含めて多岐にわたりますが、本稿では恩納間切の検者を務めた人物の家譜を取り上げて紹介します。

恩納間切の検者とその周辺

検者とは、首里王府が疲弊した間切を再建するために派遣した役人のことで、おもに農民の指導・監督をする役割がありました。一部では、王府の役職にありつけず田舎下りした士たち（屋取集落の士たち）を監視したようであるとの言及もあります。

では、首里士の家譜を見ることにしましょう。『呉姓家譜』（那覇市歴史博物館所蔵複製本）七世 幸孝の記録には、「乾隆二十五年庚辰十二月朔日為恩納間切検者叙勢頭座敷」とあります。

幸孝は1760年12月1日に恩納間切の検者となり、勢頭座敷（従六品）の位に叙されたことがわかります。恩納間切の検者として確認できる内容としては古い時期のもので、内容はシンプルです。しかしながら、実は「恩納村史編さんだより68」で紹介された王文治の扁額（恩納村指定文化財 恩納村博物館にて展示）に関係する人物でもあります。1756年に中国より来琉した冊封使に随行していた王文治に書を依頼したのが呉姓久高筑登之親雲上幸孝で、検者として在任中の1763年のことでした（川島淳「歴史資料を集めて読み解くこと」恩納間切番所の光景を中心に「参照」）。家譜の記事だけでは見えてこない事ですが、首里王府から派遣された検者としての本分とは別に、文化の伝播者としての姿が浮かび上がります。

もう一人、首里士の家譜を見ることにしましょう。『明姓家譜』（那覇市歴史博物館所蔵複製本）九世 長和の記録によると、1831年12月1日に恩納間切検者となっています。翌年3月17日夜に恩納間切